

# 14. 忍路子を開く

## 鷺野辰次郎

※明治37年5月2日生、明治45年樺太郡浦臼転住。

### 入殖当時の古い人

父（善太郎）の忍路子入地は、明治43年2月で、浦臼村から転住したもので、私は学校の関係で2年遅れて入地した。

忍路子の入殖者の最初は、父のほかに、大下芳吉、木島治佐七（子、長太郎）木島藤之助（子、正雄、実）上田長太郎、後藤仙次等で、大西乙吉（孫、憲治）洞口新兵衛、斉藤三之助等が続いて入植した。この人たちの中には、私の家に泊って小屋掛けをした人も居る。

斉藤長七も少し遅れて入り、後に団体の沢の八重樫利三郎が入った地域（現菅野正吉）を、最初に開拓した人である。

大西さん等と同じ頃に、我妻林次郎（子、源六）同源次郎（孫、重利）等も入っている。

右沢は、山形団体が最初の入地者だが、忍路子入口は何故か入殖する人がなく、何時までも開拓されず、道も悪く、大木が沢山生い繁っていて、熊の通り道だった。

洞口新兵衛は、私が14才（大正6年）で馬追いをした時には、天北国境に移住していて、小林の茶店を引き継いで経営していた。近くに菅野（子正吾）さんも居た。忍路子の方は、弟の洞口稲次が、私の家の少し下の方で、農業を暫らく続けていた。

### 造材状況

西興部村地域は造材が盛んで、特に忍路子から良材が伐り出されて居た。元田中茂作の住宅のあった附近に、忍路子川の流送のトメがあって、あそこに木材を溜めて流していたが、大正2、3年頃だったろう。興部の米田千松さんが造材師で、主にセンの木を主体にして、ナラやタモのような重い木は流さなかった。

私の入った時は山火事の直後で、青木が一面に、焼けた山に立っており、皮もむけていなかったが、本当に見事だった。これらが後に炭砦の坑木に伐り出されたのだ。

木材を搬出する橇類は、大きな角材はタマ橇で、その他馬橇が使われたが、橇あとが深く切れ込み、引っくり返る欠点があった。

炭砦用割棒、矢板が盛んに搬出されるようになると、ヨツと言って土橇のように、幅の広い橇に、板金を張った重心の低い、引っくり返らないのができて、運搬の能率が上がるようになった。

その後、角材、丸太や、長材を積むに便利なバチバチができたが、これは木材搬出の上で、最も大きく変わったものの一つだろう。

### 馬追いの思い出

私は子供の頃から馬が大好きで、そのため長く馬とは切り離せない生活が続いたのだ。

まだ六興の教育所に通っている頃、家の近くにつないでいた、土産子馬に乗って学校に行き、家では馬が居なくなると、大騒ぎしている所へ帰って、大目玉を食ったこと

がある。

七重の原田鉄五郎の弟の義務さんの処には、種馬が入ったが、この村の地域では、最初の種馬だったろう。その後、暫くしてから安藤さんにも種馬がおかれるようになった。

※原田の種馬は、大正9年に、網走産牛馬組合から管理を委託されたもので、称号は 泰萬号であった。

その頃は、夏は駄鞍馬か馬車で、冬は馬橇で、滝上方面から五六峠を越えて、100頭から150頭の馬が出て来て、それに途中からや、興部、雄武方面からの馬も加わって、今では想像もつかぬ程、名寄までの道は賑やかだった。

馬追いは、澱粉や雑穀の搬送が主で、木材も流送しないものは、天北峠を越して搬出された。木材の搬出は馬橇2台で、後の橇は、うしろ向きにして木材を積んだ。なかには馬橇1台に斜めに積む者もいて、道を交すのに一苦労させられた。

馬追いは余り宿に泊まらず、馬を休憩させたら夜も眠らず往来したもので、昼夜を問わず馬の往来が激しく、道が狭いため、馬を交差するのに、必ずとっていいほど、「お前よけろ、よけない」で喧嘩したもので、果ては殴り合いになり、腕力の強い奴の言いなりになった。

下川まで鉄道が開通してからは、運搬は下川までになったが、兎に角、道の悪いのには閉口した。

### 澱粉工場操業

忍路子左沢で、初めて澱粉工場を操業したのは、大正6年で、経営は、父と大下芳吉、木島治左七の共同であった。

第1次欧州大戦で、暴騰した澱粉も、戦争終結で大暴落して、大正9年に中止した。

その頃の澱粉は、紙袋に入れ、更に匏をかけた木箱に詰めたもので、今考えると勿体ない思いがする。

大正の末、川勝さんが奥の方で澱粉工場を始め、私たちも賃ずりをして貰った。

その頃になると、私も馬鈴薯を沢山作付けするようになったので、澱粉一袋に、原料薯7俵半の賃ずりでは損なので、上手にやれば4俵半位の原料で、澱粉一袋ができることを教えられたので、早速自家用の工場を建てた。

建設したのは何年ころだったか。確か子供アイ子の生まれた年（昭和5年6月）か、その前の年だったかと思う。

そのうちに、賃ずりの依頼が多くなったので、拓殖銀行から700円を借りて、道路下に工場を新築した。

工場の大工は札滑の池本信義さん、岡根さんに頼み、水路は、瀬戸牛の小沢徳寧さんにやってもらった。

最盛期には、原料薯で2万6千俵、澱粉で3千7百袋出したが、今考えると夢のような思いがする。

※忍格子本流は、明治42年に殖民地測量が行われ、43年に開放されている。

談話中に、忍路子入口が長く開拓されなかったとあるが、入口から紅葉橋近くまでは、米田駅逓の放牧管理地のため、開拓されなかったのである。